The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	後漢の黨錮
Author(s)	神樂岡, 昌俊
Citation	懐徳. 1968, 39, p. 63-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

後漢の黨錮

神樂岡昌俊

一

漢代の學問の基本的な性格は士人階級の存在と無關係に考えることは出來ない。漢の武帝の時に董仲舒の對策を直接の動機として、儒家の學が國家唯一の公認の學として政府の特別の保護を受けることになった。それは當時の儒家思想が士人階級に好都合の主張を持っていたからである。一つの階級の支配的地位が安定すれば、自己の支配を正當づける理論が必要となる。この時、獨り儒家の學が此の要求に應じて國教としての待遇を享受し得たのである。それは孟子の

或る者は心を勞し、或る者は力を勞す。心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるる者は人を食い、人を治める者は人に食わる。これ天下の通義なり。

なる文によって代表される社會上の主張を儒家が有したからである。心を勞する者、卽ち精神勞働者は支配階級として人を治める代りに、力を勞する者、卽ち肉體勞働者たる農民から衣食を供給せられてよい。儒家の立場においては、支配階級はその支配の代償として何等生產に關係せずして、被支配階級に倚存するのが正しいというのである。これは士人が農民の租稅によって生活する現狀をそのまま是認し、さらに之を正當付けるものである。また當時の儒家は大一統の思想を有するが、これは當時漸く强大化しつつあった君主權を無條件に承認する態度に外ならず、從って君主を中心とする士人階級への政權の歸屬を間接に肯定するものであるから、彼らにとって極めて歡迎すべき思想であったのである。また、儒家は封建制度を支持するので、その經濟的基礎を爲す農民の生活保護を强調するが、漢初の士人階級は自己の經濟的安定性確保のために、農民の疲病を喜ばない。彼等が一貫して抑商政策を强行するのは、農民に對する商人

の壓迫を憂慮するからであり。この點に於ても、儒家の說は士人の利益を保障しているのである。儒家の學が國家公認の學に指定せられ、所謂博士官を立てて、その研究に從事せしめた理由は此に在るのである。これ以來、儒家の學は士人の存する限り常に學界の主流を占め、儒家は國家の殊遇を被り得たのであるが、同時に、此は學問が政治力の制約を多分に受けることを甘受したことになる。學問が眞理探究を目的とするよりも、政治への歸屬という形をとったのは、實に此の時に始まると言ってよい。政治と結合して以後の儒家の學は、所謂原始儒家とはその性格を異にし、士人階級に奉仕する御用哲學的使命を持ったものと言えるのである。

さて、漢代以後、國家公認の學問には博士官を立てて研究教授せしめる制度があった。博士の數は、最初は經學に於て七家であったが、その後、學派の分裂に從って增置せられ、漢末に於ては所謂十四博士となった。博士官を立てることは、卽ち官許の學として待遇する具體的措置に外ならないので、學者は利祿的意味に於ても之を希望することは當然のことである。然し、新たに一學派として承認されるためには、經に對する新しい解釋を提出しなければならないのであるが、いきおい穿鑿附會をもてあそぶことになる。漢書藝文志に、昔の學問をする者は、ただ經書の本文を暗誦して意味を玩味するのみであったが、後には經に傳が付き、經と傳とが別々となり、學者各々勝手の解をなし、多く聞いて疑わしきを闕くということがなく、務めて細かい意味の穿鑿をやり、こじつけて難問にうまく答えさえすればよいことになった、とある。甚だしきは、時の天子に便宜な文字を經に竄入することをも敢えてして、其の歡心を得ようとする場合も有る。前漢の秦恭が尙書堯典篇目の兩字を說くのに十餘萬言、「曰若稽古」の四字を解するのに二萬言を用いたというのは著名な事實であるが、このようなことは、訓詁穿鑿に耽るのでなければ有り得ないことである。蓋し士人階級に哲學を提供する任務を負わされた經學者にとっては、經の解釋は卽しつつ穿鑿附會の遊戯に耽ることが自ら自己榮達の途と一致していたのである。班固が「一經の說、百萬餘言に至り、大師の衆千餘人に至る、蓋し利祿の路然ればなり」（儒林傳贊）と言ったのは、當時の學界の實情をよく表現したといえる。

このように學問は政治に從屬し、政治に奉仕するものとなり、士人階級は學問を利祿を提供するものとする。しかも、その學問は絕對主義を擁護するものなるゆえ、學問を修めた士人階級・官僚は自己の立場を守ろうとするために、外戚・宦官等の妨害者を除去しようとするので

ある。

それでここに外戚・宦官の情況をみ、さらに官僚・官僚の豫備軍である太學生を考察し、官僚と宦官との衝突である黨錮の概要を述べ、黨錮のもつ意味を考えたい。

二

光武帝・明帝・章帝と續いた絶對君主制はわずか十歳で卽位した和帝の頃になると崩れはじめる。その後、夭折する天子が多く、その度ごとに親族から若い天子を立てることになると、外戚の勢力が增すこととなる。若い天子が成長し、君主の絶對性を確立しようとすると側近の宦官の力を借りなければならない。天子が死んだときも、宦官が外戚を倒して新しい天子を立てる。このように宦官が外戚にかわって政權をとることになる。後漢の統治形態はこの過程のくりかえしである。

和帝が卽位すると生母の竇太后が攝政し、兄の竇憲が匈奴を破って大將軍となり、大いに權勢を奪った。これを倒そうとした和帝は宦官鄭衆と謀り憲を殺し、竇憲の一族を一掃した。ここに宦官が政治に參加することとなったのである。卽ち鄭衆はこの功により大長秋となり、ついで鄭鄉侯に封ぜられたのである。

安帝が立つと皇后鄧氏の兄鄧騭が政權をとる。騭は儒教を好み、多くの名士を推擧して鄧氏の支援として政權の安定を圖るが、太后が死ぬと宦官は失意の下級官僚と中流以下の豪族と結んで鄧氏を倒した。利害打算だけの權力政治へ移るのである。

安帝が死んで乳兒の少帝がつぎ、閻太后が攝政となり閻顯が政權を握り宦官を壓迫したが、數ヶ月で少帝が殺され、宦官孫程が外戚を倒して順帝を立つ。孫程等十九人は帝を立て、また閻顯を誅した功により侯に封ぜられた。

ついで桓帝が卽位すると梁太后が攝政し、外戚の梁冀が代表となって、二十年以上梁氏の專制が續く。一門から前後七人の諸侯、三人の皇后、六人の貴人、二人の大將軍、卿、將、尹など五十七人を出した。梁氏の專横が目に餘ったので、これを倒そうとした桓帝は、前後左右梁氏の天下で相談相手がないので、宦官單超らと謀りこれを亡ぼした。その時宦官が一度に五人、侯に封ぜられ、それらが中常侍となった。さらに宦官らとこれにとりいる官吏は中央官界だけでなく、地方官までを獨占して、あらゆる手段で人民から稅をしぼりあげ財源をくいつくして、私用にあてたので、「田野空しく、朝廷空しく、倉庫空し」（陳蕃傳）という狀態を現出した。このように宦官の勢は益々盛んとなり、おのずからその弊も

激しくなってくる。かくて桓帝の死後まで宦官の政權がつづくが、このころから名儒李膺、陳蕃をおしたて、太學生の反抗運動が起こるのである。

以上述べた如く、外戚の權力が盛んとなり、それを防ぐために宦官を用い、その爲めに宦官の害を來したのであるが、一方、官僚勢力はどのような情況にあったか。

官僚は絶對主義政權の擁護者であり、外戚・宦官に對立するものである。

官僚勢力は順帝の時、外戚梁氏の養成するところとなった。卽ち順帝初年、處士樊英・楊厚・黃瓊を官に任じ、太學を修起し、ついで李固を擧げ、周擧・朱穆を用い、杜喬、張綱等八使を分遣し州郡を檢察せしめたのである。また、左雄の意見を用い、九卿捶扑の罰を除き、官僚の地位を高からしめた。質帝の時には郡國に命じ經學に通ずる者を選擧せしめ、ために太學生は三萬人を越し、大將軍以下六百石に至るもの、悉く子弟をして太學に詣り試せしめ、業を受け滿歲にして課試し、高第五人を郎に補し、次の第五人を太子舍人に補した。卽ち、太學生はただ豪族地主の子弟であるのみならず、官僚の豫備軍なのである。

また、順帝陽嘉二年、李固は對策の中で、「實に漢興以來、三百餘年、賢聖相繼ぎ、十有八主。豈に阿乳の恩無からんや。豈に貴爵の寵を忘れんや。然れども上、天威を畏れ、俯して經典を案ずるに、義の不可なるを知る。故に封ぜず。今宋阿母（宋娥）大功勤謹の德有り、ただ賞賜を加うれば、以て其の勞苦を酬ゆるに足る。土を裂き國を開くに至りては、實に舊典に乖く。」（李固傳）と述べているが、これは乳母を指しているが、その意は宦官にある。李固は大臣の子（父は故の司徒李郃）で敦朴に擧げられ、豪族地主階級の官僚群の利益を代表するものである。彼は天意・經典・祖宗の尊嚴より、乳母の封爵は不適當であり、政敎を壞つものであるとする。同一年に、李固はまた、宦官が政を亂すというので、外戚梁商に奏起して「數年以來より、災怪しばしば見わる。このごろ雨潤無く、沈陰鬱決す。宮省の內、まさに陰謀有るべし」と說くが、これすべて宦官に對する攻擊である。

桓帝が立ち、太后が朝に臨み、梁冀が政を輔けた時、大將軍掾朱穆は、今年の夏、月が房星にかささしたので、明年には小厄があるだろう、宜しく姦臣の天下の怨毒となる者を誅し、災咎を塞ぐべきだと說き、また、宦官を攻擊すること最も激しかった李雲は、梁冀が誅せられ、宦官單超等五人が侯に封ぜられ、朝政を專擅した時、緯書を引き說いていうには、「梁冀權を持し專擅

し、虐、天下に流すと雖も、今罪を以て誅を行なわる。なお家臣を召して之を掻殺するがごときのみ。而して猥りに謀臣を萬戸以上に封ず。……孔子曰く、帝は諦なり。今、官位錯亂し、小人諂進し、財貨公行し、政化曰に損し、尺一拜用、御省を經ず。是れ帝、諦ならざらんと欲するか。」と。李雲は此により罪せられ、陳蕃が上疏して雲を救わんとしたけれども、かなわず、雲は獄中に死し、蕃は官を免ぜられて故郷に歸ったのである。

爾後、太學生はしばしば上書し、宦官を攻訐し、時政を譏議し、公卿を品覈し、執政を裁量し、大いに所謂清議の力量を發揮したのである。桓帝・靈帝の頃になると、外戚竇武の庇護の下、宦官に對抗し、これより宦官の反擊を受け、黨錮の禍と爲り、終に宦官に破れるのである。

三

官僚のこの動きとともに、官僚の豫備軍の太學生はまた激しく宦官を憎惡している。

桓帝永興元年より延熹二年に至る十年間に太學生の上書は三次にわたり、第一次は上書して朱穆の冤罪を訟え、第二次の上書は大錢を鑄するを議し、第三次は皇甫規の冤罪を訟う。第二次以外の兩次はすべて宦官に對している。第三次の皇甫規の際には、諸公及び太學生張鳳ら三百餘人が役所に行き、冤罪を訟えている。この規模は小さいものではなく、このようなことが出來たのは、豪族地主階級の潛在勢力が非常に強大であったことに因るのである。

ところで太學生は後漢書儒林傳の序によると三萬餘生とあるが、この三萬餘の太學生は天下の各處より京師にやって來たものであり〝太學游士〟〝京師游士〟〝游學〟と稱せられるものである。この他に郡國學の學生、私人精舍の學生がある。而して各地の經師、私人講學、注籍の學生は常に數百數千人から萬人の衆きに及ぶ。（儒林列傳中に例證少なからずあり）

各地の私人教授は、自ら精舍を立て、或いは精廬と稱し、遠方來學の士を招致す。讀書の人は千里を遠しとせずして笈を負い師を尋ねるのである。この情景を儒林列傳の論の中で、「光武中年より以後、干戈やや戢まり、專ら經學を事とす。是れより其の風、世に篤し。其の儒衣を服し、先王を稱し、庠序に遊び、横塾に聚まる者、蓋し之を邦域に布くなり。乃ち經生處る所、萬里の路を遠しとせざるがごとし。精廬暫く建ち、贏糧ややもすれば千百有り。其の耆名高義にして、門を開き徒を受くる者、編牒萬人を下らず。皆專ら相傳祖し、訛雜あるな

し。王庭に分爭し朋を私里に樹つる有るに至り、其の章條を繁にし、穿ちて崖穴を求め、以て一家の說に合す。」と述べている。

太學、私人精舍中にあっては、學生は師長に對し、恭敬にして禮を盡くすことが要求される。經師の家法に對しては、篤く守り、違ってはいけないのである。所謂「專相傳祖、莫或訛雜」である。更に師の歿後に在っては、學生は常に三年の喪に服するのである。遠くの學生は千里の外より來赴するのである。

後漢の名公鉅卿、宿儒大豪にもし喪事が有れば葬に赴く者は常に數千人、多きは數萬人に至る。かれらは遠く四方より來る。門生故吏はその先師を弔し、其の舊主を弔し、同僚同學は其の故友を弔し、その知己を弔す。陳寔が死んだとき、海內の赴く者は三萬餘人。郭泰が卒するや、四方の士來りて會葬す。このことは當時の名節を重んずるの風によるのである。

太學、郡國學、私人精舍中に在って、學生の自由交游は己に黨同伐異の清流を形成し、太學生の數が增してからは、交游活動は倫理的色彩を持ってくる。蔡邕の正交論の初めに「君子は朋友を以て講習し、正人に淫朋有る無し」と說き、「仲尼の正敎、汎く衆を愛して仁に親しむ。故に善に非ざれば喜ばず、仁に非ざれば親しまず、交游方を以てし、會友文を以てし、其の正を擇んで其の邪を黜く」と說く。

當時の太學生の領袖は郭泰・賈彪・符融等である。郭泰・符融は、田盛・許劭とともに〝人倫を品鑒する〟を以て有名である。郭泰が李膺に識拔されたのは、符融の紹介による。後漢書符融傳に「郭林宗始めて京師に入る。時人識るなし。融一たび見て嗟服し、因りて以て李膺に介す。是れより名を知らる」とある。謝承書によると、「融、林宗を見、便ち之と交わる。又、膺に紹介し、以て海の明珠は未だその光を耀かさず、鳥の鳳凰、羽儀未だ翔せずと爲す。膺、林宗と相見て、待するに師友の禮を以てし、遂に名を天下に振わすは融の致なり」と記し、後漢書郭泰傳に「泰、洛陽に游び、始めて河南尹李膺に見ゆ。膺大いに之を奇とし、遂に相友善し、是において名、京師に震う。后、鄉里に歸る。衣冠諸儒送りて河上に至る。車、數千兩。林宗、唯、李膺と同舟して濟り、衆賓之を望み、以て神仙と爲す」と。符融はただ積極的に郭泰、仇覽を識拔しただけでなく、消極的には冒濫虛名の人を指斥す。晉文經、黃子艾を斥けたが如き是である。また、〝人倫を品鑒する〟人物としては郭泰が有名である。謝承書に「泰の名づくる所、人品乃ち定まる。先に言い後に驗あり。衆皆之に服す。故に陳留に

ゆけば符偉明(融)を友とし、太學に游べば仇季智(覽)を師にし、陳國にゆけば則ち魏德公(昭)に親しみ、汝南に入れば則ち黃叔度(憲)に交わる。初め泰始めて南州に至り、袁奉高(閎)を過ぎれば宿せずして去り、叔度に從い累日去らず。或ひと以て泰に問う。泰曰く、奉高の器、之を泛濫に譬うれば、清なりと雖も把り易し。叔度の器、汪汪として千頃の波の如し。之を澄ませども清からず、之を擾せども濁らず、量るべからざるなりと。已にして果して然り。泰是を以て名天下に聞こゆ」とあり、後漢書郭泰傳によると、泰は「士人を奬拔し、皆、鑒る所の如し。…後の好事、或いは附益增張す。故に華辭不經多く、又、卜相の書に類す」と。

京師の太學生と、郡國學生との間には連繫がある。郭泰は郡國を周游し、到る處、士類を奬拔し、李膺は牢脩に誣告され、その上書の中に、太學游士を養い、諸郡生徒を交結し、更ゝ相馳驅し、共に部黨を爲し、朝廷を誹訕し、風俗を疑亂すとされているのである。

李膺は、黨錮中、官僚として重要人物であり、また太學生と密接な關係がある。先に述べた郭泰は李膺の奬拔した人物であるが、それのみならず、天下の人の尊崇を受け、天下の宗師となった。後漢書李膺傳に

是の時朝廷日に亂れ、綱紀頽阤す。膺獨り風裁を持し、聲名を以て自ら高しとす。士、其の容接せらるる者有れば、名づけて登龍門と爲す。

荀爽嘗て就きて膺に謁し、因りて其の御と爲る。既に還り、喜びて曰く、今日乃ち李君に御たるを得たりと。

このように李膺は郭泰に比べ、更に尊崇の對象であり、一人の貴公子であり、また大官僚であり、官僚の豫備軍の年少の太學生の崇敬の的であった。

思うに李膺の祖父脩は安帝の時、太尉であり、父、益は趙國の相である。彼が貴公子であった所以である。初め、孝廉に擧げられ、司徒胡廣の辟する所と爲り、高弟に擧げられ、再び青州刺史に遷る。復た徵され、再び漁陽太守に遷り、蜀郡太守に轉ず。さらに護烏桓校尉に轉ず。公事もて官を免ぜられ、復た徵され、度遼將軍と爲る。延熹二年、徵され、再び河南尹に遷る。後、司隸校尉を拜す。靈帝初年、長樂少府と爲る。その官歷はこのように當時の大官僚である。性、簡亢、交接する所無く、ただ同郡の荀淑、陳寔を師友と爲す。護烏桓校尉となった時、公事を以て官を免ぜられ、また綸氏に居り、教授すること常に千人。黨禍の起るや、免ぜられて鄉里に歸り、陽城山中に居り、天下の士大夫皆その道を高尚とし、朝廷を汙穢とす。因りて當時目せられ〝八俊〟の一

と爲る。范滂列傳の論の中に李膺について述べている。

李膺、汙險の中に振拔し、義を蘊し風を生じ、以て流俗を鼓動す。素行を激し以て威權を恥じしめ、廉尚を立て以て貴埶を振わす。天下の士をして奮迅感慨し、波蕩にして之に從い、深牢を幽にし宗族を破りて顧みざらしむ。子、その死に伏するに至り、母、其の義を歡ぶ。壯なるかな。

この評は李膺が反宦官の官僚中にあっての地位と働きを示すものである。然して官僚群中にあって地位は高く、また陳蕃と劉淑を推す。陳蕃、曾て三公の首席である太尉に登り、後また太傅となる。劉淑は宗室の賢にして尚書となり、再び侍中、虎賁中郎將に遷る。すべて大官僚である。黨錮列傳に太學中の語を引き、

天下の模楷は李元禮、强禦を畏れざるは陳仲擧

と。李元禮は〝八俊〟の首であり、陳蕃、劉淑は〝三君〟の二である。

陳蕃は竇后を立つるの關係を以て、外戚竇武と密切な關係がある。卽ち、初め桓帝が幸するところの田貴人を立てて皇后としようとした。が、蕃は、田氏が卑微であって、竇族が良家なので之に大いに反對した。帝はそこで已むを得ず、竇后を立てた。よって后が朝に臨むと、蕃を委用した。蕃は后の父、大將軍竇武と同心協力、名賢を徵用し、共に政事に參じたのである。ところで竇武の出身は本傳によると

竇武、字は游平、扶風平陵の人、安豐戴侯融の玄孫なり。父の奉は定襄太守。武、少にして經行を以て著稱せられ、常に大澤中に敎授し、時事に交わらず、名、關西に顯わる。

延熹八年、長女選ばれて掖庭に入る。桓帝以て貴人と爲し、武を郎中に拜す。その冬、貴人立ちて皇后と爲る。武、越騎校尉に遷り、槐里侯、五千戶に封ぜらる。明年冬、城門校尉を拜す。……帝崩じ、嗣無し。武、侍御史河間劉鯀を召し、その國中、王子侯の賢者に參問し、鯀を解瀆亭侯宏と稱す。武入りて太后に白し、遂に徵し、之を立て、是を靈帝と爲す。武を拜して大將軍と爲し常に禁中に居らしむ。

竇武の榮顯の路は、東漢後期の外戚の辿るところのものである。かれは「在位多く名士を辟し、淸身にして惡を疾み、禮賂通ぜず、妻子の衣食は裁かに充足するのみ。この時、羌蠻寇難、歲儉に民飢う。武、兩宮賞賜を得、悉く太學諸生に散與し、及び看粮を路に載せ、貧民に匂施す」。この因緣により、かれは太學生の擁護を得、遂に三君の首領と成った。

以上、反宦官の豪族官僚集團の共に部黨、或いは宗黨

を爲した陣容をみた。これ、黨錮の背景を爲すものであり、ここに黨錮が起るのである。

四

黨錮列傳に

桓靈の間に至り、主荒に、政繆り、國命、閹寺に委ねられ、士子與に伍と爲るを羞づ。故に匹夫抗憤し、處士横議し、遂に乃ち名聲を激揚し、互に相題拂し、公卿を品覈し、執政を裁量す。婞直の風、斯に行なわる。夫れ上好めば則ち下必ず甚だし。枉を矯む、故に直必ず過ぐ、其の理然るなり。范滂、張儉の徒、清心にして惡を忌み、終に黨議に陷るが如き、それ然らずや。

とある。卽ち、國の政治が宦官に委ねられ、士人はかれらと仲間になるのを恥じる。從って、匹夫は憤りの聲をあげ、處士[注①]はほしいままに論議し、やがて仲間の者の名聲をあおり立て、互いに形容品題し、公卿を品定めし、宰相をあげつらうに至るのである。

黨議の開端は、最も早く豪族地主の甘陵の南北部の議に代表される。二家の賓客走卒、相互に攻擊し、以後は汝南南陽の范黨と爲り、兩郡の黨議は地方勢力の言論の端緒となった。

初め、桓帝、蠡吾侯たり。學を甘陵の周福に受く。帝位に卽くに及び、福を擢んで尚書と爲す。時に同郡の河南尹房植、當朝に名有り。鄕人、之が謠を爲りて曰く、

天下の規矩は房伯武、師たるに因り印を獲しは周仲進

二家の賓客、互いに相譏揣し、遂に各々朋徒を樹て、漸く尤隙を成す。是れより甘陵に南北部有り。黨人の議、此れより始まる。

桓帝が未だ諸侯であった時に學んだ師の周福が、桓帝の卽位するに及んで擢んでられて官に就く。時に周福と同郡の人なる房植が有名であったが、その地方の者は周福が擢んでられたので、房植を褒めて周福を譏り、この兩者の門下生が互いに張合ったのである。

甘陵南北部の黨人の義はこのように取舍相反し、公論を以て自己を標榜している。當時の各種豪族集團はすべて賓客を有していたので、從ってそこには公論が有った。この種の賓客は門生故吏の流であり、此の公論によって土地の名望を表わしている。豪門世家の兩家の賓客は、互いに相譏揣して甘陵南北部黨人の議を構成したのである。

黨人については范滂傳に「(汝南)太守宗資先に其の名を聞き、請いて功曹に署し、政事を委任す。滂、職に在

り、嚴整にして惡を疾む。其の行、孝悌に違い、仁義に軌せざる者有れば、皆埽迹斥逐し、與に朝を共にせず。異節を顯薦し、幽陋を抽拔す。……郡中中人以下、怨を歸せざるなし。乃ち滂の用うる所を指して范黨と爲す。」とある。

かくて、流言は轉じて太學に到り、太學中の輿論を激動した。太學生の領袖郭泰、賈彪と大官僚の階蕃・李膺・王暢らは深く相結納し、互いに相標榜し、また、外戚竇武にたより、謠言は更に盛んとなった。かれらの公卿に對する貶議品題は、力を持ち、多くの官僚をして自ら安んぜざらしめた。

此れより流言、太學に轉入す。諸生三萬餘人、郭林宗、賈偉節、その冠爲り。並びに李膺・陳蕃・王暢と更々相褒重す。學中の語に曰く、

天下の模楷は李元禮、强禦を畏れざるは陳仲擧、天下の俊秀は王叔茂

又、渤海の公族進階、扶風の魏齊卿、並びに危言深論して、豪强に隱さず。公卿より以下、其の貶議を畏れ、屣履して門に到らざるなし。

黨人は宦官に對し、猛烈な功擊を展開した。李膺が宦官張讓の弟張朔を案殺し、杜密が太山太守と爲り、宦官子弟の令長であり奸惡有る者を捕えて案じ、岑晊が賂を中官に遣って顯位の富貴を得た張汎（當賈）を誅した等の如き皆是である。これらのことは宦官を恐懼させた。李膺傳に載す〝此れより諸黃門常侍皆鞠躬屏氣、休沐にも敢てまた宮省を出でず。帝怪しみて其の故を問う。並びに叩頭して泣きて曰く、李校尉を畏ると。〟豪族地主階級の攻擊の下にあって、ついに皇帝をして怪しみてその故を問わしめる程、甚だ大なる脅威を感じさせた。

かくて第一次の黨錮は張成の事件によって起った。桓帝延熹九年のことである。

時に河內の張成、善く風角を說く。占を推せば赦に當る。遂に子をして人を殺さしむ。李膺、河南尹爲り、督促して收捕せしむ。既に宥に逢ひて免かるるを獲たり。膺、愈憤疾を懷き、竟に之を案殺す。初め、成、方伎を以て宦官と交通し、帝も亦頗る其の占を誣う。成の弟子牢脩因りて上書して「膺等太學游士を養い、諸郡の生徒と交結し、更々相驅馳し、共に部黨を爲し、朝廷を誹訕し、風俗を疑亂す」と誣告す。是に於て天子震怒し、郡國に班下し、黨人を逮捕す。天下に布告し、忿疾を同じくせしむ。遂に膺等を收執す。其の辭の連なる所、陳寔の徒二〇〇餘人に及ぶ。或いは逃遁して獲ざる有れば、皆、金を懸けて購募す。使者四出し、道に相望む。明年、尚書霍諝、城門校尉竇武、並

びに表して請を爲し、帝の意稍〻解け、乃ち皆赦されて田里に歸り禁錮終身。而るに黨人の名、なお王府に書す。

このように豪族、官僚と宦官との鬪爭は表面化し、宦官が勝利を得たのである。その後桓帝死し、靈帝が卽位し、大將軍竇武が政を輔け、太傅陳蕃と宦官を誅せんことを謀るが逆に殺される。そして建寧二年、宦官曹節、侯覽は張儉の事を借り、第二次の黨錮がおこる。

又、張儉の鄕人朱並、中常侍侯覽の意旨を承望し、上書して「儉、同鄕二十四人と別に相署號し、共に部黨を爲り、社稷を危くせんことを圖る。……石に刻みて墠を立て共に部黨を爲し、儉、之が魁と爲る。」と告す。靈帝詔して刊章して儉等を捕う。大長秋曹節此れに因り有司に諷して奏して前の黨の故の司空虞放、太僕杜密、長樂少府李膺、司隸校尉朱寓、潁川太守巴肅、沛相荀翌、河內太守魏朗、山陽太守翟超、任城相劉儒、太尉掾范滂等百餘人を捕う。皆獄中に死す。餘は或いは先に歿して及ばず。或いは亡命して免かるるを獲たり。此れより諸の怨隙を爲す者、因りて相陷害し、睚眦の忿、濫りに黨中に入る。又、州郡旨を承け、或いは未だ嘗て交關せざる有るも、亦禍毒に離かる。其の死徒廢禁さる者六七百人。

これが第二次の黨錮である。

第二次黨錮より十六年、中平元年に到り、黃巾の亂が起った。

この十六年の中、二度の大きい波瀾があった。一つは、熹平元年、竇大后崩じ、朱雀闕に書する人があって、言うには「天下大いに亂れ、曹節・王甫、太后を幽殺し、常侍侯覽多く黨人を殺し、公卿皆尸祿にして忠言有る者無し」と。ここで司隸校尉段熲に詔して四出して逐捕し、太學游士にまで及び、繫がる者が千餘人あった。もう一つは、熹平五年、永昌太守曹鸞が上書して黨人の冤罪を訟えた。帝は怒って鸞を殺し、又、州郡に詔して更に黨人、門生故吏、父子兄弟をしらべた。その位に在る者は免官禁錮し、五屬にまで及んだ。

光和二年に到り、帝は和海の言を用い、黨錮、從祖より以下、皆解き放たれることができた。

ついで中平元年、黃巾の賊が起り、中常侍呂强が、「黨錮久しく積み、人情怨み多し。若し久しく赦宥せざれば、輕々しく張角と謀を合せん、變を爲すこと滋大にして之を悔ゆるも救うこと無けん」と奏請するに至り、帝はその言を懼れ、黨人を赦し、誅徒の者は皆故郡に歸し、黨錮は落着したのである。

注 ① 前漢の社會には處士といわれる者は稀であるが、後漢

の社會では處士と呼ばれる者がすこぶる多い。處士とは、儒家的學問と儒家的德行を併せもち、そして在野無官のものが鄕黨の稱贊を得てはじめて處士たるの名を克ち得るのである。

㉓　漢代において、官吏が禁錮されるということは、官吏たる身分を剝奪されて、庶人の身分におとされることである。

五

漢代は天子を中心とする官僚支配の機構が社會のあらゆる分野に互って確立し、絕對主義が勢力を占め、儒家思想もその影響によって先秦の自由な立場を失って所謂經學の形に定着したのである。

學問思想の絕對主義化というこの傾向は、兩漢を通して一貫した現象であるが、後漢は一層甚だしいと言うことができる。前漢にあっては儒家の學が國敎として獨尊的地位に置かれた反對給付として、漢の國家の神聖と新しい支配階級の存在を正當づける理論を提供しなければならなかった。つまり、絕對主義と一致し、若しくは相補うが如き考え方が、學問、思想の根底を支配したのであって、之が人々の實踐にまで滲透してその行爲の一般的規範と爲る程には至らなかった。後漢の時代は此の點に於て前漢より徹底した現象が見られる。その直接の原因は、後漢の光武帝が名節を奬勵したことにあるが、一般的理由としては、絕對主義的學問思想の普及が考えられる。後漢に於ては經學は今文古文と稱するが如き學派的對立差異を超越して人の行爲の規範となるまでに、その權威を高めていたのである。

黨錮は桓靈の世に起った事件で、當時政府の樞機にあずかっていた宦官が、自己を誹謗する一群の名節の士を逮捕した政治事件であるが、實際的には經學が實踐の一般的規範とまで爲ったことと關連する一個の社會問題であった。後漢書の著者范曄が此の事を重視し、特に黨錮傳を立ててその顚末を記錄したのも此のためである。此の事件が單なる政界における黨爭でなく、思想的背景を豐富に有するとされるのは、當時黨人の領袖として嚴しく宦官の彈劾を行なった郭林宗、陳蕃、李膺らの支持勢力が實に三萬餘人の太學生に在り、所謂處士橫議、政治批判の中心が學府に在ったからである。黨錮の厄に遭った此等名節の士は經學的立場から正しい絕對主義を飽くまで擁護せんとしたために、その妨害者とみなされる宦官を排斥せんとしたのである。

この事件と關連して考えられるのは淸議や鄕黨の人物批評などが一つの社會的傾向として共通の意義を有するに至った現象である。つまり、經學が日常行爲の規範と

考えられていたのである。

魏の時に行なわれた九品中正の法という官吏任用令は、後漢末以來のこの新しい風潮に順應する目的を以て創設されたことを思うならば、清議や鄉里の評價がいかに社會的權威として承認されたかがわかる。これ等はすべて絕對主義的學問思想が理論の世界を律するのみでなく、知識人の日常生活をも深く規律するに至ったために生じた現象といってよい。後漢の靈帝の時、天下の名士を三君八俊八顧八及八厨の五級に分けて評價することが行なわれたのは此の一代の空氣をよく表明している。中國史を通じて儒家の學が權威を認められた時期は決して少くはないが、後漢時代ほど廣汎かつ深刻に人心を左右したことは他に類をみない。

しかるに、このような時代に在っても、なおすべての束縛の外に獨立して自由な立場をとり、經學的世界觀や、その他のいかなる思想に對しても批判の權利を持つ學者が絕無ではなかった。典型的な經學時代はそれ自體の中に既に自己否定の契機を包藏していたのであって、鄭玄の如き學者が出て、文獻、學派、思想の三方面において整理作用を行なったことは、後漢の經學の頂點を示すものであったと同時に、既に何等かの轉換が萌しつつ有ったことの、一つの有力な現われと見られる。かくてここに黨人派の限界を見ることができるのである。